

遺跡公園の活用事業を充実させるのは遺跡博物館の継続的な研究活動である

……遺跡公園から現代社会へ発信活動を支えるパブリック・アーケオロジー……

山田昌久（静岡大学客員教授・東京都立大学特任教授）

1. 遺跡の価値は変わらないのに評価は変わる

世界各地にある遺跡公園は、発掘調査によって特別な歴史的価値を有するとの評価によって、その地に残され市民その価値を公開・活用される場である。日本や韓国に限らず、多くの国で国家成立以前の先史時代遺跡群が、史跡として保存・活用されている。中国では国家形成に関わる重要遺跡に対して、手厚い研究助成が行われ、大規模な博物館が建設される。そして新石器時代の重要な遺跡も、遺跡顕示による自国文化の価値づけを果たしている。ドイツ系アメリカ人の考古学者 Lothar von Falkenhausen は、中国考古学のこうした傾向を historiographical orientation(修史傾向)として批判している。しかし、日本でも縄文・弥生時代の遺跡を誇る示し方は少なくない。市民国家の系列史になった歴史は、先史社会を自国前史としてつなげた評価を指向する傾向があるからである。

さて、課題は「史跡の活用」にある。公園という空間は広く市民に供される空間ではあるが、「遺跡公園」は他の「都市公園」や「緑地公園」とは異なり、歴史的価値のために保全された空間である。もちろん、子供たちにとっての遊びの空間として使用されることは、有って然るべきである。また、そこにある緑地は歴史的価値とは別に、都市住民にとって憩いの空間ともなるだろう。しかし、歴史的価値を有することで存在する遺跡公園の活用とは、そうした市民の一般的な公園利用とは異なる利用や関心をうながす、文化理解のための発信が重要な活用項目になる。

その際に問題となるのは、ある時点で「特別な歴史的価値」と評価された内容が、その後の発掘調査で多数確認されたり、新たな歴史的価値を有する遺跡が加わったりすることで、①特別性が薄まること、②新たな特別性が順次加わること、である。

今回のシンポジウム開催地である静岡県登呂遺跡は、弥生時代の集落や水田遺構そして木製農耕具などが発見されという、顕著な情報群から日本の稲作文化の始まりを示したことで、国の特別史跡に指定された。日本は「瑞穂の国」と言うような水田・稲作を特色とする国、という考えが有り（よく考えればこのことは日本以外にも適用できるものなのだが）その稲作文化の成立に関わると誰もが受け止められる水田遺構の発見は、第二次世界大戦敗戦後の日本国民に大きな感銘をもたらした。昭和30年代の日本史の教科書には、ほとんどすべてのものに「考古学的成果」として登呂遺跡が取り上げられた。

しかし、21世紀の日本史の教科書に載っている弥生時代の遺跡は、佐賀県の吉野ヶ里遺跡・島根県の西谷墳墓群・鳥取県の青谷上寺地遺跡・大阪府の池上曽根遺跡などで、登呂遺跡は掲載されていない。それは、弥生時代の歴史的評価が、水田稲作の展開の下に、

- ① 中国の皇帝から賜った銅鏡群を保有する首長が存在する九州、
- ② 後期段階ではあるが継続的に王墓が作られ続けた山陰、
- ③ 多重環濠を有し絵画に示された楼観が描き出された近畿、

など稲作を採用したことで生成した「社会状況を示す遺跡」が明らかになったことを、教科書が示すようになったからに他ならない。新発見が研究成果となりがちな現代日本の考古学の現状は、「研究者もマス

コミも新しい遺跡を消費する」ことに迫われがちになる。「国民共有の財産と位置づけられた遺跡を事前調査していく制度」下では、歴史学の研究課題を設定した遺跡発掘よりも「内容のある調査成果」が注目されることになっているのである。⇒事前調査による無課題調査のアーケオロジーは、新遺跡消費に明け暮れる発見史に陥っている。

2. 弥生時代幻想からの覚醒

最近の考古学では、都出比呂志による古墳時代前期を初期国家として評価する研究構想が、寺沢薫によって九州の首長による中国世界との外交の存在に注目した弥生時代に初期国家を描くことが主張されだした。この新視点は非常に重要な卓見であるが、北西部九州の「初期国家」は必ずしも古代日本と同じ空間の統一社会であるとは限らないので、都出の考えた「初期国家」を否定するわけではないのかもしれない。

先史考古学の成果を「日本史」という歴史系列に含めて、「縄文時代」「弥生時代」を一つの文化・一つの時代とすること、に舵を切った第二次世界大戦敗戦後の日本史構想は、まだ一つの社会になっていない先史時代を、「日本」として描くことを「自明」としてきた。現在は、その認識を再検討する時期に至っているのである。

王国の経緯を記録する「歴史」や、英雄の行動を書き留めた叙事詩などに替わって、フランス革命以後に、市民国家の動向を「民族」という地域集団概念を描くことで、集団系列を記録する「新しい歴史構想」が生み出された。その土地に残された記録を探る手段として、考古学は注目され、18世紀末から19世紀にかけてヨーロッパ各国に考古学会が設立され、「国民国家史の始原期を描く役割」を果たす仕組みが生まれた。しかし、韓国では「三国時代」「原三国時代」「無文土器時代」「新石器時代」と時代名称が付され、世界の石器時代の中にある時期から3つの国による分割にいたる歴史を描きだしている。

イギリスの考古学者 V.G.Childe は、当時の進化史観に沿って「狩猟採集(経済)社会」から「農耕牧畜(経済)社会」への進化、西アジア起源の農耕のヨーロッパ世界への伝播を描いた。日本考古学にも大きな影響を与えた、この社会人類学の社会概念を先史世界の解釈に適用した歴史構想は、人類がどのように集団形成を進めたか、社会形成を進めたか、を整理する手続きがないがしろにされている。近代にいたる過程で形成された、集団知・社会知自体の形成過程研究を担う先史考古学者が行なうべきは、定住による系統集団の形成や定住集団間に形成される地域社会の追及である。それを疎かにして、「定住型の狩猟採集民」「欠蓄農耕社会」などとおさまっているのは、先史文化を区分できないので先史考古学者失格である。

国民国家の始原期の歴史整理課題は、国家形成に至る集団形成や社会形成を描き方が重要になる。弥生時代の登呂遺跡の居住者は「日本人」へ続く人々ではあるが、「日本」という土地空間認識など、考えもしなかった人々である(山田昌久:2006、山田昌久:2023)

3. 史跡の価値をブラッシュアップする学芸員の日常活動＝パブリックアーケオロジー

史跡公園を市民とつなぐ役割を担っているのは、史跡公園に敷設された博物館・ガイダンス施設の学芸員である。登呂遺跡においても静岡市教育委員会によって「特別史跡登呂遺跡再発掘調査」が試みられ、遺跡評価を更新する活動があった。考古学会をあげて行われた調査から60年近くたった時点で、数々の見直しがなされた。

重要なのは、この遺跡評価の見直しは一度ではなく常に更新があってこそ、史跡の活用的基础になる価値のブラッシュアップが継続される点にある。昨年度から静岡大学と静岡市により、「登呂遺跡の価値を探り韓国無文土器時代の遺跡と連携する」プログラムが立ち上げられた。このことで、史跡の評価自体の平準化や新しい研究成果の付加、がなされることに成ると考えられる。

正直に言って、

- ① 伊都国王墓や吉野ケ里遺跡など、初期国家ともいえる北西部九州の社会や
- ② 青谷上寺地遺跡や西谷墳墓群など、渡来人がもたらした新技術が駆使され、四隅突出型墳丘墓が系統的に造成された山陰の社会
- ③ 池上曾根遺跡や唐古・鍵遺跡など、大型建物や多重環濠に囲まれ大きな社会へと進む近畿地方中心部の社会

と比較すると、登呂遺跡以東の弥生社会はまだ西日本各地の歴史動向とは異なるものであった可能性が高い（むしろ弥生町遺跡自体も同様に「弥生（文化）時代」の範囲は東海東部以東に限定されると言える）。弥生（文化）時代を、北西部九州は「板付、吉野ケ里（文化）時代」、山陰は「青谷上寺地、西谷墳墓（文化）時代」、近畿中心部は伊都国や那国を盟主とする「池上曾根、唐古・鍵（文化）時代」することで、古墳時代から展開する、北海道北東北以外の日本列島の多くを纏め上げ始める大和王権による統一化展開以前の、地域文化を位置づけることが「日本列島内の歴史形相を正確に押える」ことになる訳である。

進化史観の見直しが進む現代の歴史研究の中であって、東海東部の社会を未発達な稲作文化とするのではない価値の設定が必要となる。また、この地域は住居検出量が特別に多数の蓄積が成されているので、有用な地域社会形相の一モデルを抽出できる点で、重要な空間であると考えられる。

そこで、この基調講演で主張したいのは、史跡公園の博物館学芸員や近隣の大学など研究機関の研究者による、史跡の価値をブラッシュアップする研究活動の大切さである。登呂遺跡では、幸いなことに登呂博物館には考古学の学芸員が配置され、静岡大学考古学研究室による稲作技術追及の研究活動が継続している（静岡市教育委員会：2006、篠原和大：2020,2021）、静岡大学登呂遺跡研究センターの設置など）。静岡平野の地形形成過程の解明と人類の進出や、実験考古学による水田稲作の実態解明など、他の史跡公園では十分に行われることの少ない継続研究の展開は、登呂遺跡の価値を深め、静岡市民への最新の情報発信がなされている。

今回のシンポジウム開催で、韓国の松菊里遺跡公園や伝統文化大学との連携が探られることで、日本の初期稲作文化と朝鮮半島の初期稲作文化の比較研究が始まる可能性が高いし、やがて東アジア・東南アジアの稲作文化研究に寄与する活動に拡大していくことを思うと、私はワクワクしてくる。

4. 登呂遺跡博物館への提言

このような意義深い研究のスターラインに立ったことで私が提案したいのは、静岡市と登呂博物館が、日本各地の初期稲作文化群と連携した活動を、企画展開していただきたいということである。住居・高床倉庫・独立棟持ち柱建物・水田址・木製農耕具の存在は、現在では多くの遺跡事例が蓄積していて、かつての新発見時の歴史的価値を発信し続けるのでは、登呂遺跡は新発見の遺跡の中に埋没してしまう。

毎月は無理としても、四季ごとや年二回程度は、日本各地やアジア各地の初期稲作を行なった遺跡地と、連携研究を発信していくような予算を付けた企画を続けることで、登呂遺跡の価値を更新することが出来る。こうした登呂博物館の活動を確保することは、日本列島やアジア各地の初期農耕文化の中で、登呂遺跡を位置づける活動は、ひとり登呂遺跡の活用のためばかりでなく、初期稲作文化群の個別認識を深め、日本・韓国・中国の歴史を越えた理解を深めることにも、大きく貢献すると考えられるのである。

幸いなことに登呂遺跡の周りでは

- ① 遺跡に関心を持ってくれる市民、
- ② 登呂遺跡の研究を進める大学、
- ③ 水田稲作技術比較研究プロジェクトメンバーの協力
- ④ 韓国の遺跡・大学との連携

など、いい関係が構築されつつある。

登呂博物館の活用活動には、背後に形成されつつあるこうした動向をうまく巻き込んだ構想の下での展開が期待されている。活用や社会発信を担う遺跡公園の博物館こそ、パブリック・アーケオロジの推進者として期待される存在なのである（山田昌久：2016）。

引用文献

静岡市教育委員会 (2006) 『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書 (自然科学分析・総括編)』

篠原和大 (2020) 「登呂遺跡を活用した日本列島初期農耕文化についての実験考古学的研究」『人類誌集報 14』

篠原和大 (2021) 「登呂遺跡の実験考古学—弥生水稻農耕集落モデルの再構築」『人類誌集報 15』

寺沢薫 (2021) 『弥生国家論—国家はこうして生まれた』 啓文舎

都出比呂志 (2011) 『古代国家はいつ成立したか』 岩波新書 1325 岩波書店

山田昌久 (2006) 「縄文・弥生幻想からの覚醒」『講座・現代の考古学 2 食糧採集社会の考古学』 朝倉書店

山田昌久 (2016) 「遺跡公園でこそ可能なパブリック・アーケオロジ」『仙台市地底の森ミュージアム・縄文の森広場研究報告 2016』

山田昌久 (2023) 「集団形成と社会形成を踏まえた先史社会生業研究」『人類誌集報 17』